

## 徳島の政治的リーダー、一八六八年～一九一二年

『東アジア史 第六巻』オーストラリア国立大学高等研究所 一九九三年十二月）所収

アンドリュース・フレイザー

逢坂俊男 訳

## 序

この論述は五人の徳島の政治的リーダーのバックグラウンド、人物とその役割を述べる。彼らの内の二人はまた中央政府のトップの地位についている。そこでの政治活動と貴族院のような組織での政治活動は、重要ではあるけれど、研究からは除外されねばならない。彼らのすべてのケースにおいて、どのようにして、どんな成功によって彼らの生れた県の利益を促進することに結実したのが主テーマである。彼らを支持した人々と、地方政治での民衆参加の拡大もまた調査されるであろうけれども。

徳島県は他県と同じように、明治時代には場所をあらそうように、その独特の長所と短所の組み合わせをもっていた。以前には日本の十七の最も大きな領国（二五万七千石）の心臓部であった阿波という単一の国の生来の住民である、そのリーダーたちはおそらく、いくつかの国もしくは小さな藩国の合併の後に形成された多くの他の県の人々より、より継続的かつより強力なグループ結合を示している。他方、阿波国は幕末の政治においてかなり受動的な役割を演じてきていた。一八六八年以降、薩摩・長州・土佐・肥前に比べて見劣りがした。彼らの藩は、明治維新の先頭になつてきていたし、またその国のリーダー

たちは当時、政府や政治で頂点のポストに着き、その地位を以後の四〇年間保持したからであった。藍の日本における主導的な生産者、徳島県は進んだ商業経済を持っていた。しかし、長年、四国アイランドといふかなり辺鄙な場所、三大都市や、より中央の県に比較して、富においてだんだんと衰退し、よりスローな工業発展へと導かれていった。一九〇〇年頃に化学染料が発明され、藍の必要性がドラスチックに落ち込んでいった時、さらなる一撃で苦しんだ。

いくつかなり素描的な研究は、明治時代における政治と経済の発展を連結させることを試みてきた。<sup>1)</sup>

しかし個人的なキャラクターと動機は最も重要なままであり、この故に、この論文の伝記的な構成は物語の流れという若干のロスにもかかわらず、重要である。そして、もし、もここで述べる政治的リーダーたちが国家というステージでただ一時期の様相だけを作っているのであれば、それはそれで、よりよいことである。彼らは中央の有名な政治家たちが国家の唯一の構築者ではなかったということに人々を思い起こさせる。一八七〇年代の広範な農民反乱と猛々しい士族反乱は、政府を脅かしていたが、徳島においてその反響は弱いものであった。しかし、ほとんどの他の県と同様に、穏健さと妥協がそこでは広く行われていた。このことは、大変容易に眺められる、近代日本への重要な貢献であった。

三大都市、および四〇ほどの他の県における、政治的リーダーシップの比較研究は類似性もしくは対照性の興味深いポイントが用意されているかもしれない。徳島の指導者たちの特徴的な姿は彼らのプロとしての柔軟さと、政治的に反対の側に立っているように思える時でさえ、地元の目的の追求で結ばれていた。この論述に選ばれた人々は、この県の政治的生活においてあらゆる他の人々より優れており、これらの資質を最も生き生きと表している人たちである。

### 蜂須賀茂韶（一八四六—一九一八）

蜂須賀の第一の財産はその高貴な家系である。彼の父松平齊裕は子供の藩主によって養子縁組された後、一八四四年に阿波藩を継いだ。彼は事実としては十一代將軍家斉の子供であった。彼の妻は鷹司正道の長姉であり、鷹司は一八五〇年代の京都の朝廷において閑白であり、国家の諸事についての天皇のチーフアドバイザーであった。そこで蜂須賀家の両親は民間と軍事の両方の貴族階級のトップファミリーと姻戚関係にあった。彼の個人的な特質は頑強そうな体格と愛想よいマナーと高い教育水準であり、それもまた、彼の継承した経歴を通して重要な資質であった。

有能な政治家、齊裕は一八六〇年代の激しく動く暴力をとまなう政治の中で、すべての党派と友好的な関係をとり続けた。徳川一族と親戚関係にある日本の中央の他の主導的な藩主とともに、彼は、コンセンサス（総意）と和解に根ざした新しい国家体制を生み出すために、天皇と將軍（公武合体）の間の融和のために働いた。他の諸グループは軍事的な主導権をとることに目を向けていた。西南日本の薩摩と長州藩は、王制、勤王を支持した。特に新しい統治者が国事に不慣れで、彼らの影響下に入りそうであるならば、自分たちの支配権を求める有益なツール、唯一の支配者としての天皇に復権してもらうことを求めていた。

一方、同じように、北部日本の強力な諸藩は少なくとも將軍の支配かあるいは少なくとも最高権力をもった領主にとどってもらうために戦うことを決めた（佐幕）。まだ成人前であった茂韶はしばしばこれらの危険をはらんだ年月の間、京都に於いて、彼の父の代理人もしくは代表として行動した。これは政治と外交における最初の直接的な訓練であった。

内乱が近づいてきた時、齊裕は超然としており、彼の軍隊を立ち上げることを続けていた。両勢力とも彼を強力な味方として得ようとした。すなわち彼は領国の勤王派の志士たちを投獄したり国外に追放していたが、京都における勤王分子と友好的なコンタクトを維持するために、彼の上層家老の稲田植誠、淡路島の洲本城代を、暗黙の内にその方向へと鼓舞していた。齊裕は薩摩と長州の軍隊が、一八六七年おわり頃（\*一八六八年一月三日の鳥羽・伏見の戦いか）、京都郊外で將軍の陸軍に決定的な敗北を与えたその直後に亡くなった。彼の後継者茂韶は直ちに勝利している朝廷方に加わった。新藩主は今や自分の姓名を、徳川一員の意味を持つ松平姓から、彼の国の伝統的な父祖の名前である蜂須賀姓に変え、それから、抜け目なく彼のこの地での結合を強化するため、一族の家老の娘と結婚した。

一八六八年早々、二二歳で、蜂須賀は新しい明治政府で、訴訟事を取り扱う議定官としての高位を手に入れた。一八六九年には、政府高官の間で実施された選出の後、大量の支持者を得て、彼は内務の省の長官となっている。しかしそのとき、首都のすべての他の藩主とともに、来るべき府県時代の準備のための改革を實行するため、天皇政権の知事として帰国した。

進歩的な改革者、蜂須賀は、他の主導的な藩主とともに、政府の目と完全に一致して、一八七一年に、すべての藩主国が廃止され、県に置き換えられたとき、彼の努力に対し、天皇から特別な感謝状を受け取った。特に、彼は領国のすべての債務、およそ三五万円にもなる、を感謝して中央政府に支払った。ごく少数の藩主しかそうしなかった

内のひとりだった。

前藩主として、蜂須賀は今や首都で居住することを要求された。立法院の一員の間、彼は東京大学の前身である**大学南校**に、一人の普通の生徒として通学した。寛大にも一年ごとに二万石近く支払われ、一八七六年には政府の公債で五〇万円にまで資本蓄積され、彼の個人的な資産は総計百萬元を超えるまでになり、<sup>④</sup>彼は日本で最も裕福な人物の一人となった。蜂須賀は、一八七二年に、彼自身の費用で長期の海外留学のために日本を離れた。彼と一緒に数人の徳島の若い生徒、以前の領国の役人または先導的な商人の息子たちを連れて行った。時には、「プリンス蜂須賀」は、スマートなロンドンの住所、パルマルにおいて洗練され生活を送っていたが（彼の従者や友人にとつては飾り気のないミスターであった）、けれども彼は決して退引した、また超越した貴族的な人物ではなく、ヘンリー・オーサー・ネスビットや弁護士、財務アドバイザー、ユニテリアン協会のクリスチャン、グラッドストーンの自由党の熱狂的な支持者といったような活動的でよく知られた人々と交わっていた。一八七五年から一八七八年までオックスフォード大学のベリリオール・カレッジで政治学と経済学を学び、その後自由党から首相となった、アスキルと友人として知り合っている。これらの年月の間、蜂須賀の心の中に真っ先に浮かんだことは鉄道の発達と英国の議会政治のモデルにならって立憲政治の発達を求めること、日本の緊急な必要性であった。ロンドンの勤務について二人の若い役人は蜂須賀の保護のもとでこれらのプロジェクトをフルタイムで研究するために、一八七二年には役人の職を退いた。**小室信夫**<sup>⑥</sup>は鉄道を研究した。もともとは丹後国出身の商人であつて、かれは京都で、著名な阿波学者、**中島錫胤**の生徒として勤王派の政治に没頭した。兩人とも一八七三年（一八六三年か）にゆるやかな状況であるが徳島で投獄されていた（幽囚）。一八六八年の王政復古の後すぐに小室らは解放され、武士の身分を与えられ、中央政府に雇われた。一八七〇年に、彼は蜂須賀のもとで、トップのポストである徳島藩の最高顧問

となった。彼は、蜂須賀とともに、一八九八年に彼が死ぬまで、壊れることのない、親密で、ほとんど家族と同じような関係を形成していた。例えば、彼の次男は蜂須賀の費用で英国で教育された。**古沢滋**は議政府を学び始めた。かれもまた、隣の土佐藩によって勤王活動のために投獄されてきていた。彼は、一八六八年に解放されて、すぐに、長州の木戸孝允と肥前の大隈重信を中心とする進歩的な政府の公務員のひとりであり、兩人とも立憲政治の発達を早々に擁護する者であった。小室と古沢は一八七三年遅くに、それぞれの目的を追求するために帰国した。すなわち、小室は蜂須賀の代理人として日本鉄道会社を進めるために、一方古沢は急進的な「郵便報知新聞」のジャーナリストとして民権運動を支持するために。これらの年月、蜂須賀の政治的確信は、古沢からの彼への手紙の下書にあらわれている。さらに共和主義へと英国の自由主義を採択するようにと彼をたきつけ、別な手紙では、蜂須賀の私的なチューターに対して、古沢は宣言している。我々は今、あなたの方のものからコピーした、いわゆる十九世紀の憲法を持つようになるのもそう遠いことではないというフェアな見通しを我々の面前に持っている<sup>⑩</sup>。

蜂須賀は一八七九年に帰国した。彼はすぐに外務省と大蔵省の高官に任命された。その後、彼は一八八〇年代にフランス公使と東京府知事のポストを得、それから、一八九〇年代には貴族院議長、文部大臣、枢密顧問官となっている。他方で、一八八四年には侯爵として華族の第二の地位に登った。これらの年月の間、蜂須賀は海上保険、鉄道、貿易、産業会社の推進者であり、出資者であり、管理者であった。彼はまた北海道において広大な農地の所有者となっている<sup>⑪</sup>。

海外にいたとき以外、蜂須賀は徳島県を定期的に訪問して、いつも県庁の役人や指導者たちに歓迎された。彼は実業と教育両方の地方事業のパトロンであった。また自然災害を受けた時には大きな寄付を与えた。一八八〇年代後半以降、彼の東京の広々とした邸宅で、しばしば二〇〇人から三〇〇人にも及ぶ、徳島の名士たちとの春と秋の会合

を主宰した。他のほとんどの県は、地方の利益への私的な忠誠さと擁護者の焦点であるような、このような能力と影響力のある貴族的な人物によるアドヴァンテージを持っていなかった。

### 芳川顕正（一八四一〜一九二〇）

芳川の祖父と父は零細農家であったが、それでも、よい教養を身につけ、熟練した医者としての副業をもっていた。若い方の息子、芳川は一人の藍商人のもとへ徒弟奉公に出ねばならなかった。すなわち、読み書きそろばんを習う通常の学校へ出席する一方、彼は儒教の經典への顕著な才能を示した。儒教の学習は公式には武士階級のメンバーに限られていたのだが、彼の師匠はこのことを彼に激励した。徳島城下町での医師の養子に入った後、彼はそれから最も優れたこの地の儒学者のもとで学んだ。大変貧しかったのだけれども、彼は英語を学ぶために長崎に遊学した。そこで彼は、のちに二人とも将来の明治政府で高官となることを運命づけられていたのだが、長州の伊藤博文や薩摩の森有礼のような、他藩からの若い学生のチューター（家庭教師）であり友人となった。一八六八年の後、徳島藩は彼をその藩校、長久館の洋学の教授に任命した。一八七一年に藩が廃止されたとき、芳川は、最近ニューヨークの領事に任命された森有礼のスタッフに成ることを希望したが、これにはうまくゆかなかった。しかし全く偶然に伊藤博文に会った。伊藤は即座に彼をアメリカ合衆国の銀行システムを学ぶための彼の使節団に加えた。

そのとき以降、芳川は伊藤と彼の親密な友人井上馨の庇護のもとで大蔵と殖産興業の省の役人として着実に出世していった。一八八〇年に、彼は井上を頂点とする、外務省のトップ官僚のポストへ昇進していた。一八八二年までに、彼は東京府知事としてのもう一つのポストを兼任した内務省の副大臣であった。長州の山県有朋が、一八八三年に内務大臣になった時、芳川は副大臣としての業務を続け、それから

一八九〇年の第一次山県内閣で文部大臣としての役割を果たした。一八九〇年代の残余の間、芳川は、継続する長州閣内閣で、法務・内務・通信の無任所大臣に就任、ついに一九〇四年には桂内閣の内務大臣としてつかえている。一方では、一八九六年に、子爵として貴族の爵位にのぼり、それから一九〇七年には伯爵となっている。一九一〇年に枢密院議員に任命され、のちにその副議長になった。

部下というよりも、一人の仲間、友人として、長州のリーダーたち、伊藤・井上・山県と芳川の親密な関係は語りぐさであり、彼らへの芳川の多くの手紙は、抜け目のないお追従で飾られていた。彼は個人的な不一致の間で、彼らを協調させるためのデリケートな交渉をしばしば実行した。一方で彼はまた、トップレベルの政治戦略に関する彼らの信頼できるアドバイザーでもあった。力強くエネルギー豊富な男、彼の生国の俗謡が好きでよくうたうので、**阿波の義太夫**としゃれ名付けられているこの人は、一八九〇年以後、東京での彼らの任期の間、徳島の国会代表たちの飲み会と義太夫の歌い手とのたのしみを差配する懇親会のホストでもあった。儒教と洋学の両方の学者としてよく知られ、後半の人生では彼は國學院大學の最初の学長となった。

蜂須賀氏と同じように、芳川は徳島県をしばしば訪問し、いつも、当時の県知事や地方の役人、実業家や名士に歓迎された。彼は自然災害の時、彼の生国ために大きな救済補助金を獲得するために、高級官僚としての影響力をしばしば行使した。一方で多くの県人が公務員の地位を得るために尽力した。実際、長州の保護のもとでの蜂須賀（茂韶）の優れた経歴は確かに芳川にその多くの恩恵をこうむったものである。一九二〇年の芳川の死の時、彼は従一位に叙位されていた。それは彼の死の二年前に蜂須賀に与えられたのと同じ地位であった。無名の農夫の若い息子であり、田舎の医者の子供は、このように新しい明治の貴族政治の中で彼の国の前藩主と同じ地位を手に入れていたのである。

## 井上高格（一八三二～一九三）

井上の家系は代々二〇〇石の俸禄を支給されていた上級武士であった。青年期はじめの頃、彼は阿波国藩主の家庭で書生として仕えた。一八六三年までに、井上は五〇石の追加の俸禄をもらうポストに就いた。一八六五年には**目付**に登用され、今や藩の政治政策に深く関わっていた。一八六八―六九年にかけては、**監軍**（軍監か）として徳川賊軍に対して藩兵を率いた。<sup>15</sup>一八七〇年には、彼は小室のもとで権大参事を務めていた。彼らはともに、あらゆる藩の債務を支払いできる方法により蜂須賀家の財源を整理した。それでもまだ一八七一年後に大きな個人資産を生み出した。<sup>16</sup>

井上の蜂須賀との個人的な関係は、小室との関係に劣らず、最も信頼できる友人関係であった。蜂須賀は、彼が一八七二年にロンドンへ向けて出発したとき、自分の若い息子を保護者として井上の世話に委ね、井上の次男を外国での教育を受けさせるために同行した。小室と井上はまたビジネスのパートナーであった。以前の徳島藩の五人の他の政商あるいは主導的な商人とともに、彼らは一八七四年に**有隣社**を設立した。この会社は船舶、銀行、日用品の販売と生産を実施、蜂須賀からの二五万円の借入金によって資金を得ていた。<sup>17</sup>この会社は明治日本の新しい国民経済の中で一定のシェアを得ていた。一方で将来の政治活動の財政的基礎を用意するものでもあった。

小室の招請に関して、井上は一八七三年の十二月に、人民の権利（民権）運動をはじめめるための政治同盟に加わるために東京に赴いた。政府内の薩摩と長州の藩閥支配に不満で、最近になって公務の高い地位から退任してしまっていた、以前の土佐藩の板垣退助と後藤象二郎は、その最も優れたリーダーであった。しかし有名な「人民に選ばれた国会の記念碑」である、一八七四年一月の最初のラッパの一吹きは、小室と他の人々たちによって少しばかり修正されたが、実際は古沢滋によって作成されたものであった。

板垣はこの運動の先頭に立つ地方政治組織である、**立志社**を結成するため一八七四年四月に、高知県に帰った。井上は、彼の以前の藩が現在そう呼ばれている名東県で、友好組織の**自助社**を設立した。両結社の名称とともに、サムエル・スマイルズの『セルフ・ヘルプ（自助論）』、英国中間層の自由主義の古典、のポピュラーな翻訳に由来しているのだが、彼はすでに、最初の県知事、長州出身の久保三と激しい議論を交わしており、彼を「よそ者」として地元で憤慨していた。井上と彼の同盟者たちは、きわめて広範な聴衆、とくに村長や地方公務員そして学校の先生たちを引き寄せ、人民の権利の意味を説明しようと演説会を開き、県内を巡った。<sup>19</sup>

一八七四年八月に、彼は自助社規則の草案の承認を求めて、内務省に転送してもらおうと、県知事に提出した。<sup>20</sup>結社の活動は公開の読書室を開くこと、フランスとイギリスと日本の法典を学ぶための法律学校を設置することを含んでいた。「行政権を侵す」として内務省によりカットするよう命じられた他の諸目的は、人民の権利が侵害された時、記録や報告により政府に報告されること、憲法や新しい法典への彼らの要請を支持することであった。たとえそうではあっても、おそらく地方民の感情への譲歩として、内務省は公民が「貧困と無知」により、不適切な公務命令または妨害に対して彼らの利益を守ることが出来ない時はいつでも法律による訴えや請願によって公民を支援するという、より穏健な目的には反対しなかった。

自助社は、投票によって選ばれた、議長と四人の役員、四人の書記によって代表され、すべての参加者にオープンにされた総会によって、一年期毎に運営されるはずであった。すべてのメンバーが、年齢や教育、社会的地位に関係なく、平等な権利を持つはずであった。総会は、演説を聴き、国や地方の重要なことについて議論するため一カ月に二度開かれた。

一八七四年の終わりに、八〇〇人以上が自助社に参加していた。その非公式な支持者の総員はおそらく一〇〇〇人以上を数えてい

た。残念ながら会員登録も残っていないが。井上は、地方の豊かな商人や著名な儒学者、県庁に籍をもつ以前の武士を含む、六人の他の推進者と結社を組織した。しかるに、一二人ほどの他の重要な地方リーダーたちが、すでにこれに加わっていた事も知られている。しかし、その地位と記録に関しては、一八七五年四月には、匿名の批評家が、総会のことを、仕事を持たず、たった一家族も支えることが出来ず、長く絡み合う議論の中で無駄に一日を過ごす人々、あたかも彼らは耳が聞こえず、口が聞こえないかのように、そこに愚かに座って居る、沈黙の多数の人々から主として構成されていると、地方新聞の中ではかにした。「結社は全くの無駄である」と彼は主張し、それは廃止されるべきだと主張した。怒った自助社のメンバーは数日後に、この意見に反論し、その増え続ける加盟者と、啓蒙と進歩を助長する重要な役割は、「愚かな小ばか者」にさえ明白であるはずだという事実を誇り反論した。しかし、自助社の最も多くのメンバーが貧しい以前の武士もしくは徳島市中の普通の街の人たちであったのかという疑問は残っている。

板垣は一八七五年の二月に大坂で、地方の政治結社の大会を招集した。そこで彼らは**愛国社**を全国的政党の先駆けとして結成した。いくつかの県からの四〇人の代表が出席、半分以上が自助社のメンバーであった。そして大会自体は蜂須賀の代理人としての小室によって用意された一万五千円の板垣へのローンによって資金援助された。

地方官の最初の会議が、将来の選挙による国会の原型として数ヶ月後に東京で開催された時、二人の自助社のメンバーが地方のオプザーバーとしてこれに出席した。

小室はこの機会に、蜂須賀邸に、より進歩的な県令たちを招くことに着手、彼らを民選議会へとせきたてた。会議の議長、長州の指導者木戸孝允は、ただ段階を踏んでのみという立憲的進歩の擁護者として、多分にいらだっていたのだが。

井上も、この時、自助社のメンバーに直近の出来事を報告するため

に東京にいて、説明書（通諭書）を作成し、それを東京の新聞に千部印刷させていた。一般的に公務員を軽視する数々の表現の中で、天皇自身は政府の**長官**と呼ばれ、一方でまた国家の支配者、**国王**として記述している。それは、不愉快な歴史的連想の称号であり、独立した至高権というよりもむしろ、多くの支流を暗示していたからである。

激怒した政府のリーダーたちは「通諭書」の全コピーを回収して破却した。井上は拘束され、国家に対する反逆（**国事犯**）で起訴された。彼のケースは翌年の大審院設置以前に起こっている。その裁判は苦役を伴う三年間の収監と土籍を奪うことを宣告している。しかし、芳川はいつも故郷の仲間の保護者であったから、彼の影響力ある友人井上馨によってある種の内部調停の後、どうにかこうにか、これを一年の普通の収監に戻るようにした。

自助社は他のリーダーたちによってその活動を続けた。特に、彼らは県庁によって認められたダム建設のプロジェクトに反対して抗議する八カ村のグループのために継続的な法律闘争で争った。しかしすでに和解へ移る兆候は明らかであった。そのメンバーが政府高官を暗殺する陰謀を企み、あるいは人民の権利を求めて大きな跳躍の記念碑を引寄せようとしている立志社と違って、自助社は一八七七年の薩摩の反乱の間、政府のリーダーたちを大いに救援し受動的なままだった。

蜂須賀が英国からメッセージを送り、この危機の間、阿波国の人々が平静に止まることを鼓吹して、何人かの自助社のリーダーを含む、旧武士たちの三千人以上が政府を支持するための護郷兵団を編成した。

一八七八年早々、最近になって収監から解放され、蜂須賀家の家令として今東京に住んでいる井上のために、自助社は宴会を催した。その年の後半に、自助社は突然にその解体の決定を報告し、他の政治結社にとって衝撃的な落胆をもたらした。減少する会員と財政的な困難がその理由であった。しかし、初等教育学校の設置を既に達成していること、また政府そのものの公約として、県や町村レベルでの選挙による議会を助長したことの前進の満足もあった。それは、小規模の政

治結社を設立するよりもむしろ、人々が自分を彼ら自身の暮らしに捧げ、時代の趨勢である自治政府にさらなる進展を任せるべきであると、アドバイスしたものであった。<sup>(26)</sup>

自助社の指導者たちは今や県庁の重要な地位に就くか、もしくは地方の中等学校、尋常学校、医学校の校長であった。一方、一八七九年までに阿波国の十郡中の七郡長が前自助社のメンバーであった。民権運動を見捨てたもう一つの理由は、一八七九年十一月に開かれた最初の高知県議会で明らかになった。地方の誇りは、名東県を廃止し、広域行政のための国の運営の地域として阿波国を高知県に合併したときの一八七六年の衝撃で苦しんだ。この新しい県会は土佐からの二七人のメンバーと阿波からの三一人のメンバーで構成されていた。その議長は激しい気性の立志社のリーダーである、片岡健吉であり、人民の権利に対するさらなる譲歩をさせる方向へと政府にプレッシャーをかけるために、議会を活動させないようにするよう決定した。しかし副議長、前の自助社のリーダーは、阿波メンバーに支えられて、彼を支持することを拒絶した。加うるに、阿波と土佐のメンバーはすぐに税の配分について厳しい議論に巻き込まれた。<sup>(27)</sup> 阿波のリーダーたちは今や独立した徳島県として復活されるよう自らの県のキャンペーンを始めた。そして政府は、一八八〇年にこれを認めた。政治的対立を捨て去ることは、阿波のリーダーたちが、彼らの行政的独立を回復するために払わなければならないと考えた代償であったのはもつともであった。

皮肉にも人民の権利運動は今や国民から一掃されつつあった。小室と古沢が、その最も優れたリーダーであった関西地方に於いてもそうであった。<sup>(28)</sup> 政治的議論をするクラブや演説をする結社はこの当時徳島には溢れていたが、八万七〇〇〇人の国全体に対し、たった一五〇〇人のはっきりしない地方人が「国会開設の請願」に署名し、一八八〇年四月に板垣の追隨者によって政府に提出された。<sup>(29)</sup>

井上は、もう一人の自助社メンバーが蜂須賀家の家宰として着任し

た時の一八八二年に徳島県に戻ってきた。彼は公務や銀行と実業界で重要人物としての役割に再び就いた。一八八九年に徳島市の初代市長に任命され、それから一八九〇年には衆議院議員に選ばれた。その当時、彼は一年に、かなりな額である地租五四円を払っていた。<sup>(30)</sup> 増大するたばこと林業でのビジネスからの利益も得ていた。一八九三年の彼の死後、以前の自助社のメンバーは、少なくとも次の一〇年の間は、徳島市の政治や実業界でトップの地位を持ち続けた。徳島を訪問したとき、井上の墓を参拝することは蜂須賀や芳川のような仲間の地方人にとって義務であった。そして、一九一八年に、それはまた、原敬首相のような国家の政治指導者にとっても、義務であった。

#### 阿部興人（一八四五～一九二〇）

藩の開墾計画への貢献に対して郷士の地位を与えられた村長、阿部の父は豊かな上層農民であった。より若い方の息子として、阿部は公務の経歴を求めた。武士の家族の養子となり、それは彼に、徳島城下の最も好い学派学流で儒教の古典と剣術を学ぶことを可能にした。一八六八年に、彼は藩校、長久館の講師に任命された。藩の外交方として一八七〇年に東京で勤務につき、慶應義塾で英語を学び始めた。同義塾からは彼の親類二人と将来の政治的同盟者が、一八七〇年代後半に卒業している。<sup>(31)</sup>

彼の先生であった著名な儒学者に従って、百人以上の藩の武士を伴い、阿部は筆頭家老の稲田邦植の住居を襲い燃やしてしまうという事件の主導的な役割を演じた。当時の改革の一部として邦植の陪臣の武士を平民身分にするという降格に直面して、たねのぶ（植誠）の若き後継者は一八七〇年に、勤王運動への彼の一族の過去の尽力を申し立てて、分離した別な藩の藩主として独立させてもらうことを政府に請願した。本藩の武士は、今の彼らの国の知事である蜂須賀氏への侮辱として憤慨した。阿部の師を含む、一〇人の首謀者がこの事件の後、

切腹の刑に処せられることを命じられた。阿部と他の者たちは、一生或いはそれより少ない期間の収監を宣告された。彼は次の三年間、彼自身の家に閉じ込められて過ごし、寺子屋師匠として彼の時間を過ごした。そして、彼の罪が明治政府が新律綱領を發布する以前の藩法に基づいているという理由で解放された。

阿部は、一八七五年から一八八〇年まで、県庁の役人、それから郡長として務め、これは政治的なリーダーとしての彼の後年の役割にとって有益なコネクションを培った。一八八一年早々、彼は経歴を実業界に転じ、彼の兄を支配人として、(五万円の資本金で)北海道で藍を育てるための地所を購入する会社、**興産社**の社長となった。次の年、発起人の井上高格を含む、十七人の主導的な銀行員と実業家が、北海道の魚肥を交易する会社、**通曉社**を創業した。これらの企業において、かれの価値あるアドバイザーは**近藤廉平**(一八四八—一九二一)であった。彼は学徒時代からの親密な友人であり、今や三菱会社の役員として昇進中であつた。その社長は岩崎弥太郎であり、岩崎は彼の不屈の人柄に深く感銘を受け、数年前の偶然の出会いの後に彼を雇っていたのであつた。

薩摩と長州の議員が一八八一年十月に、大隈重信と彼の信奉者たちを民権運動の隠れた同盟者として追放することで一致した時、彼らもまた彼らの隠れた支持者であると疑われた三菱会社に敵対する動きも始めた。小室のマネージメントのもとで、一八七八年以降の蜂須賀氏の実業の利益は井上馨、渋沢栄一らの人々と、今や三菱との競争が固定した三井会社と密接に結びつくようになった。一八八二年に政府は新しい会社の設置をすすめ、**共同運輸会社**を設立した。小室はその取締役の一人であり支店の支配人を兼ねた。古沢は、彼の隠れた財政的支援を受けて、板垣の新しく作られた自由党の機関誌である『自由新聞』の主筆として、民権運動を二つの敵対的な陣営に分かつたために、板垣と大隈の間の政治的統一の如何なるチャンスも壊してしまおうとする

三菱に猛烈な攻撃を加えた。この結果は彼らの長州のパトロンたちに大変歓迎され、後年彼らはそれに対して十分に報われ、両者とも貴族院の勅任推薦者としてその生涯をおくった。

大隈が一八八二年四月に改進黨を始めたとき、阿部は彼の最も信頼できる支援者の一人であつた。阿部と地方の仲間、中央の政党の規則と同一の規則によって、徳島支部を作ることを発表した。これを主導する地方新聞、『普通新聞』(一〇〇〇部発行)は**益田永武**が首筆であつた。彼は以前は蜂須賀家と関わりをもつ藩の上級役人で、誠心誠意の支援をした。八月に、徳島改進黨は市宮劇場で、中央の党のリーダーたちも出席して演説会を後援開催した。この催しは二〇〇〇人以上の聴衆を引き寄せた。一八八二年の終わりまでに、国全体の改進黨員はおよそ一四〇〇人にまでのぼり、そのうちの三七人は徳島県人であり、地方支部のほぼ平均黨員数であつた。しかし意義深い点は、県議会の三八人メンバーの内の二十人がこれに加わっていたという点であり、国全体を見渡しても、徳島は、政党がそのような多数派を有しているたった五県の一つであつた。徳島改進黨の成員はそのメンバーのほとんどが豊かな農民であり、地租を年四〇円かそれ以上を払っていた。自助社のリーダーたちと比較してみると、彼らのうちのたった五人が以前の武士であり、政治における新しい階層の出現を特色づけていた。県会に集まっている政党のリーダーとして、阿部は指揮官の位置にいた。一八八〇年に県会議員に選ばれて、彼は今や副議長であり、一八八三年には議長にのぼつた。しかし、かれのあらゆる大風呂敷(見せびらかし)にもかかわらず、阿部は事実においては、小さな活力推進のグループのリーダーにすぎなかつた。県会の副議長は以前の阿部の親密な友人であり、禁錮からの彼の解放を獲得するのに貢献した人物であり、一八八三年には地方の名士たちの大会を招集した。県内から二〇〇〇人を超える者たちが政党に加わるにはまだ時期が熟していない、中立に留まり摩擦を避ける方がよいということを決議している<sup>33</sup>。

阿部と彼の仲間たちは、政治活動をコントロールするための新しい政府の規則によって彼ら自身が無力にされたことをすぐに悟った。他の県会からの百人のメンバーとともに、一八八三年二月に国民大会に出席するため東京に行った。大会はついには警官によって解散を命ぜられた。そこで彼は地方の問題に転じ、地域の首長を議長にし、組合町村の議会の会議事項をコントロールするための権利に異議を唱えた。阿部はその問題について県令に対抗する法的告訴を提出した。しかしこれは一八八三年十一月の政府の行政訴訟裁判によって拒絶された。今となつては地方レベルでの政治活動は事実上不可能となつた。『普通新聞』は、官公庁の通告を公刊するという価値ある請負を失うことを脅かされたとき、徳島改進黨への新聞による支持を罷めた。一八八四年早々、地方政党は学習グループを装つたおよそ三十人集會に縮小され、それからその後半に中央政党とともに解体した。

他の二つの政党は一八八二年の間に徳島県で形成された。一つは百人もしくはその程度のメンバーを有した阿波自由党であり、遠く離れた美馬地方の二つの村の、ほとんどすべてが貧しい農民と、以前の稲田の別な知行地の郷士たちであつた。もう一つは政府直属の帝政党であり、そのメンバーは大抵が以前の武士で、退隠した状況の中で、国家の救済交付を誓願していた。これらの政党の両方とも一八八四年までには解党してしまつた。彼らは地方政治において決して重要ではなかつた。阿部のように、富農や実業家からの支援を少しも持つていなかった。

一八八五年十二月に、阿部は新しい方向で彼の経歴を進めることを決めた。すなわち彼は県会の議長であつたが引退し、東京へ移つた。そこで彼は大蔵省の会計書記官として加わつた。彼の部局の長は渡辺国武で、薩摩の閥に属し、後年の一八九〇年代には、第二次松方正義内閣の大蔵大臣になつてゐる。渡辺は一八七六年から一八七九年には高知県の県令をしてゐた。阿部はその当時、高知県庁の官員であつた。そして彼と親密な間柄を続けてゐた。薩摩閥は阿部の経歴の中で、官

員としても政治家としても実業家としても重要な資産であつた。薩摩のリーダーたちによる和解により、長州の指導者たちが三菱の攻撃を止め、新しい船会社、**日本郵船会社**が一八八五年につくられた時、阿部と彼の友人たちは喜んだ。彼らの同盟者近藤廉平はすぐに立身しその社長となつた。そして日本のトップビジネスの有力者の一人となつて歩み続けた。

阿部が出ていってしまった後、徳島県におけるあらゆる政治活動は表面的には挫折して休止してしまつたように見えた。条約改正をしようとして試みたのだが、西洋の権力への政府の意気地ない譲歩に反対して、民衆の不法行為が、一八八六年に国に吹きまくつた時、徳島は東京での抗議デモに加わるための一つの代表も送り込まなかつたのは、およそ四〇県のうちの四県の一つであつた。

明治憲法は一八九〇年に発効になつた。徳島県は五六五一人の選挙人を有し、国会の衆議院へ五人の代議士を選出した。この時の新しい規則では地方支部を形成することを政党に禁止した。しかし阿部は今や帰郷し、中央政党の政治的同盟者として彼の以前の改進黨の支持者の先頭に立つた。県内の最も強い選挙の地盤は阿部の生まれた板野郡であつた。彼はこの地盤を彼のいとこの**橋本久太郎**に譲つた。彼は地租年四二円を払う農民で、慶應義塾を出ており、一九一二年まで破竹の勢いの多数で選出された。阿部自身はより離れた美馬郡の選挙区から立候補した。そこは彼が一八七〇年代後半に郡長をやつていたところ、その当時県会にも選ばれてゐた。彼はこの指定席に、一九〇二年に北海道へ住居を移すまでほとんど継続して就いてゐた。一八九二年の有名な選挙干渉で小差で負けた唯一の例外を除いてだが。一八九〇年代を通して、阿部と改進黨―進歩党―憲政本党の流れの彼の同盟者は衆議院で最も多くの座席を勝ちとり、全体として最も高い支持率を獲得した。

これらの年月、阿部はまた国家という舞台の政治的リーダーでもあつた。というのは影響力ある東京の新聞、**郵便報知新聞**を経営して

いる時期だからである。疑いもなくこの新聞と他の事業から申し分の無い給料を得ていたが、事実においてはリッチマンではなく、最初に国家議員の選挙に立ったとき、彼の家族から彼におくられた地租は、ほんの僅かな、年二〇円をはらっていただけであった。しかし彼の高いレベルの教育、彼の立派な外見、雄弁家として、そしてトップの官僚との有利な接触、中央政党的リーダーとしての名声は徳島の最も重要な政治的リーダーとして、彼を際立たせていた。

たとえそうであったとしても、阿部の影響は、中央においても地方においても、すぐに衰えていき始めた。彼の党の党首である大隈重信に傾倒している追随者であったけれども、大隈が一八九八年に首相になった時、阿部は大臣の椅子を得ることが出来ず、大隈の個人的なバックアップにもかかわらず、衆議院の副議長にもなれなかった。この時期までにスミダサブロウのような、党内のライバルの政治家たちは関東地方を中心に強力な地盤を築き上げていた。阿部や彼の友人、三重県の尾崎行雄のような、もつと離れた地方のリーダーたちは党の中央権力から段々に孤立するようになった。一方では、徳島県は**地価修正運動**の主導的な拠点となっていた。(以下を参照しなさい)阿部の党が北日本の地主から強力な支援を受け、この政策に反対することを決定した時のことであるが。

伊藤博文が一九〇〇年に政友会を起した時、徳島県選出の阿部と橋本と他の二人の憲政本党の国会代議士は彼らの党を脱退してこれに加わった。より広い視野に立って、阿部の転換を見たとき、一つは彼の以前の庇護者の渡辺国武もまた政友会加わったことを注目した方がよい。三重県や鹿児島県の尾崎行雄や長谷部スミタケのような阿部と親しい間柄の他のリーダーたちもまた同様であった。阿部は最近になって北海道に移住し、今や政友会の札幌支部長となっている。彼は残りの人生をを積極的な実業活動に費やした。鉄道の推進者、ドックの開発、そして農業部門に。彼の息子の宇之八は政友会支部のリーダーとして父を継いだ。一方で影響のある**北海タイムズ新聞**(一万七千部

印刷)の所有者でもあった。阿部は最後に東京の大森に引退し住み、そこで一九二〇年に亡くなっている。

### 坂東勘五郎(一八六一〜一九一八)

坂東は、富農でもあり、酒の醸造家であった郷士の長男で、一八七八年に徳島尋常小学校を卒業した。彼は最初その地方の郡役所に籍を置き、それから立ち上がりて県庁の書記になった。坂東は、これまでに述べた四人の政治的指導者よりも二〇歳近く若く、おそらく新しい、より平凡な世代の典型であった。性格に於いて彼はでしゃばりではなく慎重で、細かい点に大きな注意を払った。

坂東は、一八八九年、県会に選ばれて、しばらくの間副議長をやり、公共事業の取り扱いと災害の救済について、県知事との激しい議論で、力のある指導者としての姿を見せた。この知事は、自分の解雇について、県会の大多数のメンバーからの内務大臣への誓願があった後、一八九二年十二月県会を解散した。しかし坂東と彼の同盟者は、知事と彼の第一秘書が、一八九三年三月、彼らのポストを退任交代した時に勝利を得た。

一八九〇年に最初の議会が開かれたその時から、多くの徳島の農民と彼らの議会の代表者たちは、地租の軽減に尽力することを、あるいは少なくともその重荷をもつと公平に分担することを決議した。彼らが、一八七〇年代後半の地租改定計画において多くの他県と比較して厳しく取り扱われてきたということを主張してのことであるが。

坂東の生まれた、水稻栽培地帯の那賀郡の農民たちはこれらの要求に全員一致していた。坂東は一八九一年二月に、三四〇〇〇人を超える徳島の農民たちによって署名された地価修正の誓願を他の地方のリーダーたちにも支持を依頼し、上京した。一八九二年までに、彼らは他県の支持者たちと同盟を結成した。それは一八九四年には**日本農民協会**を立ち上げるまでに進んだ。この協会は、政党ではなく、その

目的を支持するどのような内閣、あるいは国会機構とも協力することをいとわない圧力団体であった。この協会の五万人を超えるメンバーの内、一万人は徳島の出身であり、しかるに坂東は、この協会の演説委員会の一メンバーとして他の県下を遊説してまわった。<sup>(45)</sup>

坂東は一八九〇年には、国会議員に成るためにはまだ三〇歳の年齢制限下にあった。一八九四年までは、彼の郷土の那賀郡を中心にした選挙民は、前県会議員で徳島改進黨のメンバーを選んでおり、彼は政党とのつながりを復活していた。一八九五年九月の第四回選挙では、彼は他の人にわづか一票ばかり投じられたものの、一一三一票の投票を獲得させ、無所属で立候補している坂東へ道を開いた。坂東の選挙地盤は今や県内では最強であり、明治時代のその後の時期でもそうであった。彼は、一九一八年の彼の死まで継続して衆議院に席をもち続けた。最初に選出された時、年に地租一八二円を払っており、かなりの額であり、彼は富農と田舎の地主の利益を代表するのに非常に適任であった。

坂東は今や国会内部で地租を修正するという目的を達成する位置に立っていた。彼のチャンスは第三次伊藤内閣の時の一八九八年六月にやってきた。同内閣は鑑定された地価の、二・五％から三・七％に地価を上げることが提案していたが、その予算案は、二四七票対二七票の大多数で、それを引つ込めることを強制して、拒否された。これを継いだ大隈内閣は短命であり、国会本会議を開けなかった。一八九八年十一月に山県が首相として引き継いだ時、四％よりさらに高く地租を上げることが提案された。いくつかの県で地租を上げ、他の県ではその重荷を平等にするために地租を引き下げるなどして、国全体で地価を修正する法案とこの方法をリンクさせることを約束した。地価修正連盟を支援する八〇人の国会議員とともに、坂東は今や衆議院で力を保有していた。そういうわけで、山県は五年間に限り、三・三％の増税だけを得ることができた。しかし地価修正の彼の法案は一六一対一三四票の接近した票数で通過した。徳島県はこの法案から重要な利

益を得た。<sup>(46)</sup>そして坂東は地方の名士たちから英雄的歓迎を受け帰県した。

衆議院におけるまさかの敗北の後、伊藤博文は彼自身の政党、将来の政友会を結成しようとした。蜂須賀はこれらの計画について、一八九八年六月の山県への手紙の中で、十分に知らされていた。<sup>(47)</sup>しかしこの問題について積極的な立場を取らず、彼は慎重に発言した。それにもかかわらず、経過の事実として、蜂須賀、芳川と東京における他の徳島県人の高官たちは、三百人の地方名士たちによって支持され、一八九九年五月には阿波クラブの結成を報告した。同年十二月に発会したとき、このクラブの地元の長は徳島市長、以前の自助社の社長（井上高格）であった。坂東は常任委員会のメンバーであった。その年の終りには坂東が出席した蜂須賀の屋敷での会合の後、東京支部が結成された。<sup>(48)</sup>

阿波クラブはどんな政党ともつながりを持たない、純粋な社会グループであるということを発表した。阿波クラブは、地方経済、教育と外交問題、加うるに、詩のメドレーに関する記事を載せた雑誌の目を発刊した。もっと重要なのは、その促進者は銀行業、海運業、鉄道、藍商の地方リーダーのトップを含めていた。結成の日以来、多くの年月の間、阿波クラブは徳島の実業と政治の出来事を支配した。<sup>(49)</sup>自由党とかかわりを持ったすべての地方政治家がこれに加わったが、阿部と橋本とも二人の当時の改進黨の国会議員は離れたままであった。彼らの新聞媒体、『徳島毎日新聞』は、長州のバトロンのために蜂須賀と芳川が働いている政治戦線だとしてこのクラブを攻撃した。それは、一八七〇年代と八〇年代の『普通新聞』を継承した益田永武の『徳島日日新聞』によって、激しく非難され攻撃されていた。<sup>(50)</sup>

徳島県における政治活動は一八九九年中ずつと非常に活発であった。板垣退助や尾崎行雄のようなライバル党のリーダー達による遊説旅行は、数千人の聴取者をひきつけた。大きな変化が一九〇〇年の九月にやってきた。その時、坂東と他の地方リーダー達は東京での政友会創

立記念式に出席していた。

彼らはふるさとに帰り、政友会の徳島支部を立ち上げた。彼らの以前の同盟者たちに衝撃を与えた突然の脱党で、橋本や他の二人の当時の憲政党の国会議員に加わってもらい、政友会の徳島支部を立ち上げた。その年の終わりまでに徳島政友会は三九〇人のメンバーを有し、一九〇一年の一月にはなおその上に六七六人のメンバーが加わった。静岡県について、徳島県は今やどんな政友会の地方支部よりも多くのメンバーを擁していた。この党がその年の後半に最終的な形をとったとき、徳島は支部メンバー会員数で全部の県の中で第五位にランクされた。

しかしながら、徳島の党員名簿には、彼ら自身の、政治的な経済的な本拠で超然としたままでいる方が良いことを示して、阿波クラブを推進してきたリーダーとしての銀行家や実業家はほとんどいなかった、ということは注目される。党の主たる支持者は、今や定められた四年毎に選挙される予定である県会や市議会の議員であり、彼らは政党とかかわる必要性が増していた。国会議員に選ばれる選挙権の国税資格の縮少は、一九〇〇年の新しい法によって年に十五円から十円に引き下げられ、徳島の選挙権者はほとんど二倍になった。そして政友会のこのような強力な支部の出現はおそらくこのことの答えでもあった。

しかし、なによりも、そのことは坂東と彼の同盟者が今や、地方の諸利益のためのもう一つのキャンペーンに従事していたことを反映している、それは鉄道国有化である。政府が戦略上、あるいは経済的理由から鉄道を建設していた多くの他の県と違って、徳島は私有資本に頼ることを余儀なくされていた。徳島鉄道会社は一九〇五年に作られたが、八〇万円の全体の資本の内四三％は坂東を含む十七人の設立者によって資金提供がなされた。坂東は多額ではないが、五千円を分担していた。しかし彼がその会社で支配人のポストにつく権限としては必要であった。一八九九年までに、会社はほんの三四キロメートルの

線路を建設した。国有化のみが、高知ー高松間の幹線鉄道と結合するため、さらなる延長を確保することが出来た。

一九〇〇年に通信大臣として、芳川は鉄道国有化の調査委員会を設置した。坂東はそのメンバーの一人であった。この時期、芳川は高知県と徳島県からの代表団に、この地域の鉄道の発達を助長するために彼ができるすべてをすると約束していた。もし大蔵省が必要な資金を用意するのを拒絶したなら、鉄道運賃の増額のような別な手段によって資金を調達しようと計画していた。芳川は後に、彼が、友人である伊藤博文のために政友会の徳島支部を設立した謀り人であったことを公言していた。鉄道国有化の保証人は疑いもなく彼の成功の重要な理由の一つである。一九〇〇年まで、坂東は徳島鉄道会社の社長である。

そして彼の運動は一九〇六年に成功した。この年、徳島鉄道会社は良い条件で国有化され、その将来の発展を保証しながら、投資者に彼らの資本を取り戻すことを可能にした。重要なことは、このことが、政友会総裁西園寺公望内閣のもとで行われたことであった。徳島県における鉄道の発達はまさしくビジネスになる企業ではなかった。それぞれの路線の新しい部分が開かれた時に、大群衆が集まって熱狂的な興奮のつぼの中でこれを祝福した。

衆議院の新しい選挙システムは一九〇二年に運用されるようになった。徳島市はこの時一人のメンバーを選出した。次の一〇年間のその代表は政友会系の、もと自助社のリーダーであり、十分な多数票でその席を確保した。県内の十郡は単一の選挙区を形成し、五人のメンバーを選んだ。那賀郡で非常に強力な彼の地盤からいつものように、全体の一万票ほどから二千を超える投票を得た坂東によって先頭に立たれ、これらの四人の衆議院議員は政友会のメンバーであった。しかし彼らの一人は憲政本党のメンバーであり、その地方支部の代表であった。須見千次郎は、豊かな藍商人であり、銀行家、産業家で、地租を一年に九百円という非常に大きな額を納めており、また『徳島毎日新聞』(三〇〇〇刷発行)、今や先頭に立っている地方新聞の所有

者であった。須見の選挙の支持者は彼の生まれた麻植郡とその隣の阿波郡、名西郡の二郡に集中していた。しかし彼は県を縦断してきわめて広く支持の投票を引き出していた。徳島のようなところでは、あらかも両方に賭けるが如き、政治的多様性がいくらか保たれていたのである。須見は一九一二年まで議席を保持し、一九二〇年代には政友会の主なライバルである、憲政会の地方支部の代表を務めた。

だが阿部の場合と同じように、坂東と彼の政友会の同盟者は中央で政党のリーダーと競争するのは困難であった。一九〇三年に、彼らの従属的な役割に満足せず、坂東と徳島からの三人の政友会議員は党から離れ、芳川と阿波クラブによって固められた独立議員グループを形成した。それから鉄道国有法が差し迫っていた一九〇六年ごろ、もとの政党へ戻った。国家の舞台では、県選出の国会議員たちは行政の合理化の理由のため、県を廃止する事という一九〇三年の内閣提案を撃退しようとしたけれども、徳島県は今や政治的沈滞の中にあつた。そして彼らは藍と砂糖の関税保護のような地方の経済的利益のためにたたかい続けた。坂東は一九一八年の彼の死まで国会政治に尊敬された姿を残した。おそらくそのように献身した政治的リーダーの最後にふさわしく、衆議院の開会中に病いに倒れ、その病院で亡くなった。彼の政治的経歴からはほんの少しの財政的利益も得ていなかったと評価されたが、後に、彼のための記念碑を建てる計画は実現しなかった。

## 結語

我々は、徳島県が明治の政治においてどのような特色ある歩みをとったかを、今、見てきた。幾度か投獄されたそのリーダー、あるいは他県からの要人と出会うチャンスを得た後、自分の経歴を進めた政治的リーダーの多いことは、彼らが騒然とした、予測できない時代に生きたということを想い起こさせる。

グループとしては、彼らはおそらく「第二序列」の政治的リーダー

として分類されよう。有益な仲間たちではあるが、トップと等しくリンクされることは決してなく、あまりに過度の中央集権を心配してブレキをかけながら、政府の内部で彼らが出来た影響力を行使してきていたが。一八六〇年代に、徳島のリーダー達は、国民全体のコンセンサスに根ざした新時代を希望して、独裁的な幕府改革者と尊王派敵対者との間のバランスを維持することを求めた。明治時代に、このことは中央における方法を見失った官僚主義者と政府に於いてより大きな役割を要求され重税を課された地方名士達との間のバランスとなった。この時、彼らの最終のゴールとして選挙された国会があつた。変化と競争力のさ中で、政治的發展における突然のストップとスタートをとらなつて、皮肉な矛盾が多くあつた。たとえば芳川は一八六〇年代後半に薩摩藩によって西洋の学問の翻訳者で専門家として雇われた。それから一八七〇年代早期にたまたま偶然に長州の庇護を受けるようになった。井上高格が、小室と古沢によって促され、一八七四年に急進的な民権運動に積極的に加わるようになった時、政府の官僚であつた芳川は、長州の庇護者と共に『東京曙新聞』で、漸進的な政治発展の必要性を擁護した。後に、一八八〇年代に山県のもとで、内務省の副大臣としての間、芳川は阿部とその同盟者のような徳島のリーダー達が多くの問題についてそれに挑戦したとき、地方行政に関する政府の政策を指導した。このことより以前に、民権に対する彼のより早い時期のキャンペーンにもかかわらず、井上高格の徳島の支持者たちは、一八七八年に突然にその運動を放棄した。しかるに小室と古沢は関東と関西地方に於いて、この運動の最も重要なリーダー達の間で活動していたのであるが。

一八九〇年に憲法を發布した後、権力の新しいバランスは、衆議院における薩長のリーダー達と政党の勢力との間に出現した。蜂須賀と小室、古沢と芳川は今や貴族院のメンバーであるか政府高官であり、すべての者が長州のリーダーたちの政治的同盟者となつていた。しかるに、徳島県に於いては、阿部と改進黨・進歩党・憲政党の流れの彼

の同盟者は、薩摩と密接な関係もって、最も強力な政党を形成した。一九〇〇年の政友会の形成に関して、徳島の政治的リーダー達は、別な唐突なシフトの中で、阿部と彼の同盟者がそれ（政友会）に加わるために、彼らの政党を捨て去ったときに再び結集した。その時、国会は交代しうる官僚と政党内閣の枠組みの内部で「特殊利益」政治の新しい時代に入っていた。

ライバルの離間策と日和見主義の間で、裂け目を促進するような明治時代の政治における一般的な術策、あるいは温和着実のような和解的なスローガンは、同時代の政治的扇動者達によって軽蔑されたけれど、たびたび徳島のリーダー達の活動を鼓舞した。一方で、彼らは行動する時はファイティグ・スピリットにあふれていることを示した。様々な時に井上と阿部と坂東は当時の県知事の厳しい批判者であった。一八九〇年以降、衆議院選挙へのどんな立候補者も政府びいきのコネクションをどうしても認めようとしなかった。「吏党」と「軟派」は徳島の政治における共通の悪口の用語であり、選挙演説会での両方の陣営は、そのような非難によって反対者を悪く言うことを追求した。しかるにどちらの陣営も、純粋な人民の党、「純民党」の支持者であることを宣言していた。

蜂須賀は、彼の頭の中では、高級官僚としての高い経歴にもかかわらず、その早い時期には、民権運動を支持することについて何の懸念ももっていないかった。しかるに後にはより保守的でありつづけ、明治憲法体制下では都合の悪い変化を用心して、彼は終生、経済的自由主義の擁護者であった。以前のほとんどの藩主は一八七七年の第十五国立（貴族閣）銀行に彼らの家禄を預金し、たった二藩主だけがそうすることを拒絶した。それは、肥前国の前藩主（後の大隈重信の政治パトロン）の鍋島直大と蜂須賀であった。蜂須賀がこの決定をした理由は、彼の、その特権的な諸権利と政治的保護の不承認であり、当時にとられた、ユニークな態度であった。その後は彼の友人でありビジネスパートナーの渋沢栄一とともに彼はいつも私営企業と独立したビジ

ネス組織のために戦った。実際的で個人的な理由の故に、井上馨と三井企業連合に中心をおいた長州の企業ネットワークと強い結びつきを持った。蜂須賀はそれにもかかわらず、薩摩や三菱との関係を持った阿部やその他の以前の家臣達のパトロンであった。たとえば、阿部の兄は長い年月の間、蜂須賀の北海道の財産の管理人として雇われていた。

異なった官僚の保護者、対立競争している政党のメンバーであることを余儀なくされた時でさえ、徳島の政治的リーダー達は地方の経済的利益を守ることに満場一致であった。それは一九〇三年に徳島の八十九銀行が一時的閉店に導かれ、蜂須賀の財政危機を解決するため、彼らすべてが結集した時に見られたようにそうであった。いくら他の県では政治的抗争が地方銀行のコントロールのために、激しい戦いで火花を散らし、あるいは彼らの失敗に導かれたことさえあったのに。

一九〇〇年以降の日本の政治的発達における徳島のリーダーの役割に関しては、一八九九年までは達成されなかったが、成人の普通選挙権を彼らが早くから支持していたことも指摘できる。県の高額国税支払メンバーの三木與吉郎は一八九九年に貴族院に成人の選挙権の誓願を提出した。そして坂東を含め、四人の衆議院議員は、一九一〇年にそのための不成功に終わったこの法案を支持した。彼らが国民の政治において、理想主義的な理由のために、あるいは国家の政治において、徳島の範囲を広げる希望から活動したのかどうかは興味深い質問である。それに対しては、さらなる研究が答えを用意することができるかもしれない。

(註)

(1) 例えば、大石嘉一郎「福島事件の社会経済的地盤」(福島事件の社会経済的基盤)『自由民権期の研究』四卷(有斐閣 一九五九年)第二卷一三(一七頁を参照せよ)

- (2) これらの年月のもっと詳しい説明には、アンドリュウ・フレイザーの「阿波(徳島)藩の政治的発達 最後の十年 一八六〇～一八七〇」『極東の歴史に関する論攷』(以下 PFEH) 二五巻(一九七七年三月)一〇五～一六一頁
- (3) 日本史籍協会『岩倉具視関係文書』(岩倉具視の書簡) 八巻 リブリント版(東京大学出版会 一九六八年) 第二巻 四九五頁
- (4) アンドリュウ・フレイザー「蜂須賀茂韶(一八四六～一九一八) 封建領主から近代企業家へ」由井常彦・中川敬一郎『歴史の展望における日本の経営』(東京大学出版会 一九八九年) 二九ページ以下
- (5) 蜂須賀のネスビットとその家族との親密な交際は間接的ではあるが、「小室信夫関係文書」の中で見ることができ、「小室信夫文書」マイクロフィルム 明治文庫 東京大学、リール四「ゲートリュード・ネスビットの小室の息子三吉への手紙」
- (6) 山田立夫の『小室訥庵翁父子小伝』(小室と彼の息子の短い自伝、一九二四年)を見よ。アンドリュウ・フレイザー「小室信夫(一八三九～一九八八) 明治の政治家・実業家」、PFEH 三巻(一九七一年三月) 六一～八三頁
- (7) 小出植男の『中島錫胤』(徳島 一九三四年) アンドリュウ・フレイザー「中島錫胤(一八二九～一九〇五) 明治の学者―愛国者 公務員で華族」PFEH 八巻(一九七八年九月) 一～三五頁
- (8) 遠山茂樹『人物日本の歴史』(日本のリーダーたちの歴史) 一四巻(読売新聞社 一九六六年) 十一巻 八～九頁
- (9) 蜂須賀の「共和制」はおそらく英国の政治の当時の出来事から導き出されたものであろう。寡婦となったビクトリア女王は一八七〇年代早々では非常に不人気であった。チャールズ・ディルケに導かれた自由党の国会議員たちは、当時、共和国への呼びかけを展開した。アントニオ・フレイザー編集の『英国の王と女王の生涯』(ロンドン FUTURA 版、一九七七年) 二五六頁
- (10) 古沢滋関係文書(古沢滋文書) (県政資料室 国立国会図書館 東京) 項目三六。これらの書簡のフルテキストについては、アンドリュウ・フレイザーの「古沢滋(一八四七～一九一〇)、一八七四年八月周辺の、蜂須賀茂韶と他の人たちへの書簡草稿で見られる明治初期の自由主義」を見よ。PFEH 九巻(一九七四年三月) 二二～二四頁。
- (11) 由井と中川『日本の経営』三三～三九頁。露木亀太郎「蜂須賀茂韶公の隠れたる業績」(「蜂須賀茂韶侯爵の隠れたる業績」(一九三七年) 六一～三〇頁
- (12) 芳川については、水野秀雄の『伯爵 芳川顕正 小伝』(東京 小川印刷所 一九四〇年)、朴亭因子(宮下軌太郎)『大臣の書生時代』(内閣大臣の若き日々) (東京大学館 一九〇二年) 七二～八六頁 岡本監輔『越山先生伝』草稿 徳島県立図書館、またアンドリュウ・フレイザー「芳川顕正(一八一四～一九二〇) 明治の高級官僚また大臣」PFEH 四巻(一九七一年) 一七～四〇頁
- (13) 三宅雪嶺『同時代史』六巻(岩波書店 一九五三年) 第五巻 二一六頁
- (14) 徳富猪一郎『我が交友録』(中央公論社 一九四一年) 七五～七七頁
- (15) 井上については、村田丑太郎「井上高格の伝記」草稿 徳島県立図書館 飯田義賢「井上高格小伝」『徳島市民文化』第二巻(一九五四年十月) 一〇～一五頁
- (16) 徳島県史編纂委員会『徳島県史』六巻(徳島、一九六六年) 第五巻 二〇頁
- (17) 由井と中川『日本の経営』三六頁 『徳島県史』 第五巻 四三四～四五頁
- (18) 『徳島県史』 第五巻 二二頁、五五頁
- (19) 池内基一『回顧録』第一巻(一九二九年) 写本 徳島県立図書館 七九～八二頁
- (20) 『公文録』一八七五年 内務省 二A 九項 一五二 記事一九(国立公文書館)。徳島県におけるこの時期及びそのあとの政治的発達については、三好昭一郎「徳島自由民権運動史論」(徳島 教育出版センター 一九八一年) 不藤明子「徳島に於ける自由民権運動自助社の研究」『史窓』四(一九七三年八月) 二二頁以下、添田喜一「徳島の自由民権運動」『史窓』一七(一九八三年十二月) 一四頁以下、アンドリュウ・フレイザー「藩から県へ」徳島に於ける政治的発達 (二八七～一八八〇) PFEH 十二(一九七五年九月) 八七～一四七頁
- (21) 徳島新聞七、九日号(一八七五年四月) (四国大学図書館蔵)
- (22) 村雨退二郎『史壇 蚤の市』(北辰堂 一九五七年) 八五～八七頁
- (23) 『公文録』一八七六年 司法省 二A 九項 一八〇〇 記事一五
- (24) 憲政史編纂会収集文書目録 記事六七二「井上侯爵家所蔵書簡」(井上家によって保管された芳川顕正の手紙) 一〇〇～一〇一頁(憲政資料室 国立国会図書館)。おそらく、この時期に於ける司法省のトップは長州閥のリーダー、山田顕義であったことを知られたい。

(25) 『公文録』一八七五年 内務省 二A 九項 一四八六 記事六三二  
A 九項 記事五二 一八七八 司法省 二A 一〇項 二三六〇 記  
事二〇

(26) 明治編年史編纂会『新聞集成 明治編年史』一五卷(本邦書籍 一九  
三六年)。一八七八年には、多くの旧武士が徳島の第八十九国立銀行に、  
新しく発行された家禄債権を預けた。(由井と中川の『日本の経営』三一  
頁を見なさい。政治の前に事業を置く自助社の決定がこのこととどのよ  
うに関係したのかどうかは一つの開かれた疑問である。

(27) 鈴木安蔵『自由民権運動史』(一九四七年) 一二六―二八頁、徳島県  
議事事務局『徳島県議会史』二卷(一九七二年) 第一卷 五五―六〇頁

(28) 原田久美子『自由民権政社の展開過程 天橋義塾の場合』『京都府立総  
合資料館紀要 創刊号』(一九七二年三月) 四七頁以下、アンドリュ  
ー・フレイザー「小室信夫と彼の関西地域の人民主権運動の同盟者の役割」  
PFEH 一〇卷(一九七四年九月) 八三―一五頁

(29) 大津淳一郎『大日本憲政史』一〇卷(東京 宝文館 一九二六年) 第  
二卷三〇八頁『普通新聞』一八八〇年八月三、五日、一六〇〇人の徳島  
県人がこの誓願や他の同様の誓願に署名しているという東京新聞のレ  
ポートの真実を疑っている。

(30) 一八九〇年、直接国税で年十五円の納税が衆議院議員として支持され  
選ばれるために要求された。(全人口のたった一パーセントだけが資格を  
得た)この額をうまく払える人は裕福な人びとに限定された。

(31) 阿部に関して、桜庭善一郎『阿部宇之八伝』(阿部宇之八伝記刊行会  
一九三三年) 二九三―三〇三頁を見よ。アンドリュ  
ー・フレイザー「阿部興人(一八四五―一九二〇) 明治の地方政治家で実業家」 PFEH  
五卷(一九七二年) 一〇九―一三四頁

(32) 近藤に関して、末広一雄『男爵 近藤廉平伝 並びに遺稿』(新見書  
院 一九二五年)

(33) 『品川弥二郎関係文書』書類の部 記事一三〇二(憲政資料室 国会図  
書館)

(34) 伊藤隆「明治十年代前半における府県会と立憲改進黨」『史学雑誌』七  
三卷六号(一九六四年四月) 二三―二五頁、また大日方純夫『自由民権  
運動と立憲改進黨』(早稲田大学出版部 一九九一年) 一七四頁を見な  
さい。

(35) 我部政男『地方巡察使復命書』二卷(三一書房 一九八〇年) 第一卷

七三八、七三九頁

(36) 『公文録』一八八三年 司法省 二A 一〇項 三六〇七 記事六  
(37) アンドリュ  
ー・フレイザー「徳島県における政党の発展 一八八〇  
一八八九」 PFEH 一一(一九七五年三月) 一〇七―一四七頁

(38) 『阿部家文書目録』(北海道立図書館 江別) 記事九三八。またウイリ  
アム・D・ウォレイの『三菱とNYK』(ケンブリッジ マサチューセツ  
ツ ハーバード大学プレス 一九八四年)

(39) 井上清『条約改正』(岩波新書 一九六九年)

(40) 林茂「立憲改進黨の地方分布」『社会科学研究』九卷、四、五卷(一九  
五八年二月) 八三、八七、八八頁。アンドリュ  
ー・フレイザー「徳島県  
における国会議員選挙政策 一八九〇―一九〇二年」(キャンベラ、アジ  
ア研究学部オーストラリア国立大学 一九七二年)

(41) 『中央新聞』一八九八年八月二八日

(42) 市原理之『阿波人物鑑』(徳島日々新聞) 一九二八年) 三一五―一七  
頁 『徳島日々新聞』一八九三年六月七日

(43) 『徳島県議会史』第一卷 一八二頁、『徳島日々新聞』一八九二年十一月  
十一日

(44) 『品川弥次郎関係文書』書類の部 記事九一九(憲政資料室 国会図書  
館)、有尾敬重「本邦地租の沿革」(一九一四年) 九九頁

(45) 『民報』一八九二年二月一日、『東京日々新聞』一八九四年一月七日、  
三月二八日、四月二四日、『郵便報知新聞』一八九四年七月一九日『読売  
新聞』一八九四年三月一四日。

(46) 坂野潤治『明治憲法体制の確立』(東京大学出版会 一九七一年) 二一  
六頁 『徳島日々新聞』一八九八年六月二九日

(47) 徳富猪一郎『侯爵山県有朋伝』三卷(山県有朋侯記念事業会 一九三  
三年) 第三卷 三三三頁

(48) 『徳島日々新聞』一八九九年 五月九、一〇、一三、一六日、十一月五、  
十日。

(49) 『徳島県議会史』第一卷、一三九―一四〇頁

(50) 『徳島日々新聞』一八九九年十一月十日

(51) 山本四郎『初期政友会の研究』(清文堂 一九七五年) 五八、五九頁、  
前島省三『明治中末期の官僚政治』(京都 汐文社 一九六四年) 二二―一頁  
(52) 『憲政史編纂会収集文書目録』記事六七、『翠雨荘日記』(伊東巳代治の  
日記) 三卷 一九〇一年一〇月一七日(憲政資料室 国立国会図書館)

- (53) 原奎一郎『原敬日記』六卷（福村出版 一九六五年）二卷 二〇六頁。
- (54) 『徳島県議会議史』第一卷、二七一頁、『徳島市史』第三卷（徳島 一九八三年）第三卷六七九頁
- (55) 酒田正敏『近代日本に於ける対外硬運動の研究』（東京 東京大学出版会 一九七八年 二二二～二三三頁、二四一～二四二頁、『徳島県議会議史』第一卷一四〇～一頁
- (56) 安田浩「日清戦前後の近代皇帝システム」『アクタ アジアティカ』五九（一九九〇年十月）五六頁
- (57) 『阿部家文書』記事一〇九、二五八八、二五八九。
- (58) 升味準之輔「地方に於ける実業と政治」『国家学会雑誌』七五卷 第七、八卷（一九六二年）三九七～四〇一頁
- (59) 松尾尊兌『大正デモクラシーの研究』（青木書店 一九六六）二八、九二、九七。また三好昭一郎『徳島自由民権運動史論』一九八～九頁を見よ。

【補注】

- ①各偉人の肖像を中心としたFigure 十二枚（写真と挿画地図一）は省かせていただいた。
- ②引用文献の著者の名称の漢字化のできないものは仮名で書きました。
- ③本文の（ ）の 記事には翻訳者の説明を附加したものがあります。
- ④本稿は、『徳島県立文書館研究紀要』六号（二〇一四年）に掲載した「極東の歴史に関する論攷十二号」の「藩から県へ、徳島県における政治的発達、一八七一～一八八〇年」（翻訳）の続編として翻訳掲載した。あわせて参照いただければ幸いです。